

仲道郁代 ベートーヴェン 鍵盤の宇宙 第1回「誕生」(2013.12.17)

仲道のトーク、スライドを交えながらのショパン連続演奏会に続く、ベートーヴェンの全ソナタほかを6年間12回のコンサートのなかで網羅する壮大な企画1回目。前半は、ベートーヴェンの象徴となり最後のピアノソナタ3番と同じハ短調であるシンボリックな作品であるとの解説のあとに「ドレスラーの行進曲による9つの変奏曲」と「3つの選帝侯ソナタ2番へ短調」。

後半は、ハイドンに献呈された作品2の3曲。3作品12楽章の全てにおいて新たな試みに挑戦したベートーヴェンの熱意を熱く語った後、重厚な音響、対照的な軽快で繊細な音色を楽章ごとに楽しませてくれた。特に3作品のなかでスケールの大きい第3番は、ピアノ協奏曲に匹敵するような作品と自ら説明するように、奥行きのある濃厚な響き、管楽器の明朗な響き、洗練された構成感で本人が納得しながら演奏しているのが伺えた。初心者も専門家も楽しめるベートーヴェン企画である。(12月17日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第403回定期演奏会 (2014.6.14)

ガイアシリーズ第3弾、副題は「水―波に翻弄される舟」。名誉客演指揮者のテイエリー・フィッシャーの得意とするラヴェルの『海原の小舟』から、風のように軽やかに始まった。今回のハイライトのひとつであるプロコフィエフの野性的なエネルギーで溢れる『ピアノ協奏曲第

3番』は、第8回浜松国際ピアノコンクールで第1位に輝いたイリヤ・ラシニコフスキーにより、卓抜したテクニックとドラマチックな表現力で演奏された。アンコールは、対照的な、繊細な響きのモンポウの前奏曲ニ短調を演奏。今後の活躍が期待される。後半のメインは、シュミットの『交響曲第4番』。冒頭の半音階的進行で不安定な表情のトランペットの主題が展開され、叙情的なチェロの旋律を挟み、トランペットの主題が回想される様は、川の流れるを感じるような流麗な演奏であった。最後は、ラフマニノフの『ヴォカリーズ』の切ない旋律を透明感

のある好演で聞かせた。(6月14日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

石川馨栄子ピアノリサイタル (2015.2.14)

2002年デビュー以来、名古屋を中心に定期的にリサイタルを開催し、精力的に活動しているピアニストの石川馨栄子。今回のプログラムは、組曲、変奏曲、練習曲という小品が集まった形式による作品に焦点をあてる。最初のバッハの「フランス組曲大5番」は、華麗で生き生きとした響きで奏で、ホール残響音が交錯しチェンバロのような音色を生み出していた。続くベートーヴェンに影響を与え、モーツァルトにははめずらしい短調の『ソナタ第14番』のあとに、同じハ短調のベートーヴェンの『自作主題による32の変奏曲』は、壮大で劇的な展開をうまく構築した。最後は、ショパンの『12の練習曲作品25』。個性的かつ技巧的な一つ一つの小品を研磨させ、全体を通した作品として構築する能力を必要とする意欲的なプログラムであった。アンコールは小品2曲。軽快で華やかな演奏により、民族的でリズムカルなフアリヤの『恐怖の踊り』で終えた。(2月14日、ザ・コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第430回定期演奏会 (2015.12.12)

「メタ」シリーズ「日本民謡の昇華」は、常任指揮者ブラビンスによ

る英国作品特集で、日本の民謡調の旋律を駆使したホルスト「日本組

曲」から始まる。2作目は、名フィルコンポーザー・イン・レジデンス

で、イギリス在住の作曲家、藤倉大への委嘱新作「フルート協奏曲」。

5つの部分で、フルート、ピッコロ、コントラバス、バスの4本のフル

ートの特徴を生かし、息、声、倍音などの複雑な音響がオーケストラと

美しく織り交ざる。珍しいコントラバスは、カデンツアの部分を繊細な

音色で奏でる。終演後、クレア・チェイスにより演奏された藤倉の「リ

ラ」は、この作品の素材を生かしたコントラバスと管フルートの作品

で、協奏曲でも効果的であった下降グリッサンドなどを含み、両作品と

も藤倉の作品を理解した素晴らしい演奏であった。後半の大編成の「惑

星」は、愛知県立芸術大学女性合唱団も加わり、7曲の味を生かした演

奏で魅了した。(12月12日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第432回定期演奏会 (2016.2.20)

「メタ」シリーズ「物語の再編」は、名フィルと3回目となる指揮者、

ロリー・マクドナルドの切望したチェコの作曲家による作品特集で、ヤ

ナーチェクの歌劇「利口な女狐の物語」組曲から、ミステリアスな民

族的な旋律で始まる。様々な場面の凝縮されたマツケラス編の組曲は、

豊かな音色で物語を語った。次のマルティヌーの「オーボエ協奏曲」

では、バイエルン放送響の注目若手首席オーボエのラモン・オルテ

ガ・ケロを迎える。オーケストラにとけ込むような透明感のあるオーボ

エの暖かい音色で始まり、2、3楽章のテクニカルなパッセージや郷愁

を誘う抒情的な旋律を含んだソロの部分は多彩な音色で観客を魅了した。

アンコールには、バッハの「無伴奏チェロ組曲2番」からジグを華

麗に奏でる。最後のドヴォルザークの「交響曲第8番」は、金管楽器

の不安定なバランスに気になるところがあったものの、緊迫感のある熱

演であった。(2月20日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第146回定期演奏会 (2016.3.4)

今回の公演は、チャイコフスキーの2作品に焦点をあてる。前半は、

『ピアノ協奏曲第2番』。この作品を何度もヨーロッパで指揮してきた

レオシュ・スワロスキー、第1番をセントラル愛知と共演した経験があ

るピアニストの**務川慧悟**、この2人のチャイコフスキーのピアノ協奏曲

への深い理解と解釈による演奏であった。2楽章は、今回のジロティ編

曲ではヴァイオリンとチェロの二重奏がカットされているが、ピアノト

リオの箇所は、抒情的な美しい響きで観客を魅了した。ピアニスティッ

クな華やかな技巧、重量感をもったこの作品を、自分の世界観で巧みに

表現し観客を虜にしたパリ在住の若手ピアニスト務川の今後の国際的な

活躍が期待される。アンコールは、リストの『愛の夢3番』。後半は、

『交響曲第6番・悲愴』。スワロフスキーによる絶妙な音響バランスと

テンポ感による緊張感のある熱演により、この名曲を飽きる事なく堪能

することができた。(3月4日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第434回定期演奏会 (2016.4.16)

名フィル創立50周年開幕は、音楽監督・小泉和裕の就任披露公演から始まった。「基本の重視」と「指揮者とオーケストラは家族」をテーマにより選曲されていた。前半は、ベートーヴェンの『交響曲第4番』。

古典的なスタイルが確立され、均整がとれ洗練されたこの作品を、丁寧に磨き上げ、明朗で音響のバランスが研ぎすまされた、緊張感のある演奏であった。後半は、R・シュトラウスの4管の大編成による『家庭交

響曲』。切れ目なく演奏される単一楽章で、家庭の各々の人物の特徴を描写するテーマが、全体を通して様々な楽器や形を変え登場する。各々の楽器の特徴的な音色がバランスよくオーケストラに反映され、後半の金管楽器の跳躍やハイピッチの多用されている華やかなクライマックスでも、各々の楽器の役割が、歯切れのよい快活な演奏で堪能できた。新音楽監督を迎えて、指揮者、奏者全員の気迫が感じられ、今後の進展が

楽しみである。(4月16日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第435回定期演奏会 (2016.5.20)

今回は、芸術監督、主席指揮者としてウラル・フィルの評価を躍進させたロシアのドミトリー・リスにより、ソビエト連邦が生んだ2人の国際的作曲家による作品に焦点をあてた。1曲目は、シヨスタコーヴィチのバレエ「黄金時代」組曲から3作品。ワルツ、マーチなどの目まぐるしい場面転換を、諧謔的で軽妙巧みな表現で観客を惹き付けた。2曲目は、昨年、東京国際ヴィオラコンクールで優勝したスイス人のアンドレア・ブルガーをソリストに迎えて、シュニトケの「ヴィオラ協奏曲」。ユーリ・バシユメトからの依頼により書かれたもので、高度な技巧と音楽性を必要とし、独奏部分が多い作品であるが、ブルガーによる見事な技術により情熱的に表現された。後半は、シヨスタコーヴィチの『交響曲第6番』。ロシア的な熱い情熱的で執拗な重々しさや、皮肉っぽい諧謔さを、同国人であるリスにより、絶妙な表現によりうまく

引出していた。(5月20日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第148回定期演奏会 (2016.6.10)

今回のプログラムは、「民族の誇りとロマン」をテーマにチェコを代表する作曲家の一人、スークの「幻想的スケルツォ」から始まる。ドヴォルザークの影響を強く受けており、民族的な旋律を明朗、軽快にまとめあげた。次のモーツァルトの「フルート協奏曲第2番」では、セントラルのフルート奏者である**磯貝俊幸**によるソロ。スワロスキーがオーケストラとのバランスを微妙に調整するなか、カデンツァも優雅に吹きこなし、まとめあげた。磯貝は、この地域で人気があるようだ。後半は、ドヴォルザークの「交響曲第7番」。作曲者と同国のチェコ生まれの指揮者のレオシュ・スワロフスキーは、3楽章では、ボヘミアの舞曲を明朗に歌い、情熱的に4楽章を歌い上げた。アンコールは、同じくドヴォルザークのスラブ舞曲集から、憂愁なヴァイオリンの旋律で人気のある作品72-2を、民族的な響きと哀愁を込めて、コンサートを締めくくった。(6月10日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第436回定期演奏会(2016.6.17)

今回の創立50周年シリーズは、前半はモーツァルト、後半はラヴェルの構成。1曲目は、オペラの指揮でも定評のある高関健により、歌劇

「魔笛」序曲から、明朗に軽やかに始める。2曲目は、「ピアノ協奏曲

第27番」。昨年、浜松国際ピアノコンクールで優勝した国際的に活躍

する若手のピアニスト、アレクサンデル・ガジェブによるソロ。優美

で美しい旋律を歌い上げ、アンコールは、モーツァルトとは対照的な、

情熱的で難曲であるプロコフィエフの「ピアノソナタ第7番の3楽

章」を、熱演し喝采をあびる。後半のラヴェルは、「ラ・ヴァルス」

から始まる。心地よいワルツのリズムにのり、ラヴェルらしい上品な音

響の変容をうまく表現していた。最後のバレエ「ダフニスとクロエ」

第1、2組曲では、大編成で色彩豊かな作品を、各々の楽器の洗練され

た響きと、幻想的な雰囲気、緻密に構築させた。

(6月17日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

神奈川フィル十名フィルスペシャル・ジョイント・コンサートへ

名フィル、神奈川フィルの両団体に関わっている指揮者の川瀬賢太郎による、2つの楽団のメンバーによる共演となった。前半は、モーツァルト弾きとして国際的に活発に活動を行うピアニストの**菊池洋子**をソリストに迎えて、「**ピアノ協奏曲第21番**」。2楽章は、菊池により天井の音楽のような澄んだ響きで満たされた。3楽章は、快活で装飾的なピアニスティックな旋律とオーケストラとの対話をバランスよくまとめた。後半は、**シヨスタコーヴィチ**の「**交響曲第7番**」。トータル130名の奏者で、長大な作品である。指揮者の川瀬は、各々の楽章に作曲者の熱い想いが込められた大作をうまく音響的に構築し、様々な楽器のソリストイックな演奏も、聞き手を楽しませた。アンコールは、「**白鳥の湖**」フィナーレ。両楽団による共演の為に、特別な緊張感が各々の奏者に生まれ、演奏にもいい影響があつたのではないか。(6月27日、日本特殊

陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第439回定期演奏会(2016.10.22)

ポーランド人の世界的指揮者、アントニ・ヴェイットにより、藤倉大の

「レア・グラヴィティ」から10月定演は始まる。弦楽器のハーモニ

クスと2台のヴィブラフォンによる緊張感のある音響で始まり、複雑な

音色が絶えず変容し作品を構成する。音の流れ、浮遊感に満たされた充

実感を得た。2曲目は、ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」。ロ

シア人のミハイル・プレトニョフのピアノは、一つ一つの音を真摯に

聴き込みながら、美しい音色を知的に構築していく。派手な演奏で圧倒

するのではなく、多彩な音色を使い分け、オーケストラとのバランスも

緻密にコントロールし、客観的な立場で全体を見通しているような彼の

世界観で観客を引き込んだ。アンコールは、ラフマニノフの前奏曲「鐘」。

多彩な美しい鐘の音色の創造は、息を呑むほどであった。最後のシベリ

ウスの「交響曲第1番」では、民族色や劇的な構成を丁寧にまとめ好

演であった。(10月22日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第441回定期演奏会(2016.12.9)

今回の公演は、来週「第九演奏会」で現役引退公演となる名誉指揮者
モーシエ・アツモンの指揮で、ベートーヴェンの『ヴァイオリン協
奏曲』、ブラームスの『交響曲第2番』。前半のベートーヴェンは、イ
リア・グリンゴルツのヴァイオリン独奏による。グアネリ・デリ・ジ
ェスの名器の音色は、彼の繊細な演奏により透明感のある多彩な音響を
醸し出した。アンコールの、ヴァイオリンの超絶技巧作品、パガニーニ
の『24の奇想曲作品1第16番』では、喝采をあびる。後半のブラ
ームス2番は、アツモンの思い入れの強い作品で、本人の希望により3
番からの変更となったそうである。若い頃ホルンを専攻していたことも
あるようで、想いが込められてか歌い込まれたホルンの牧歌的なテーマ
は印象的であった。終演後の長いカーテンコール、花束を贈られたアツ
モンの姿からは、自分の十八番での伸び伸びとした演奏による達成感が
感じられた。(12月9日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第154回定期演奏会 (2017.5.12)

第5回宗次エンジェルヴァイオリンコンクールのセミファイナル出

場・特別楽器貸与の助成を受けているアンドレア・オビソによるチャ

イコフスキーのヴァイオリン協奏曲。テーマの変容を音色や響きを駆

使しながら飽きさせずに、作品をうまく構築。牧歌的な2楽章、ヴァイ

オリンソロは、管楽器との掛け合いを聴き込んでバランスよく応答。3

楽章は、エネルギーにスピード感にのり念入りに歌い込み、観客を

魅了した。イザイの無伴奏ヴァイオリンソナタ2番の第1と2楽章

の2曲をアンコールで演奏。透明感のある繊細な静かな作品も美しく歌

い上げた。後半は、チャイコフスキー交響曲第3番。第1楽章、弦楽

器のミステリアスな出だしに始まった後の管楽器の掛け合いが、不安定

なバランスで響きに潤いが欠けていた。後半にかけては勢いにのりパワ

フルにまとめあげる。終楽章は、掛け合いも明瞭にティンパニの決然と

した響きとともに爽快に駆け抜けた。(5月12日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第446回定期演奏会(2017.6.2)

「ロシア革命100年」をテーマとした本公演は、指揮者、川瀬賢太郎により、吉松隆の弦楽合奏による美しい響きで満たされる『鳥は静かに』から始まる。コンサートマスターの後藤龍伸の哀愁漂うソロともに、弦楽の緊張感のある響きによる短い哀歌のあと、ベルリン・フィルコンサートマスターであるノア・ベンディックス//バルグリーを迎えて、チャイコフスキーの『ヴァイオリン協奏曲』。緻密に洗練されたアゴーギグによる円熟して深みのある演奏で歌い込まれた彼の演奏に、バランスよくオーケストラが応え、観客を魅了させた。アンコールは、バッハの『無伴奏ソナタ第3番の3楽章』。後半は、シヨスタコーヴイッチの『交響曲第12番』。ロシア革命を具体化し、レーニンを偲んで作曲された切れ目無く演奏される4楽章による厚い緊張感のある響きをうまくまとめあげた。安定した響きのティンパニを始め打楽器郡が根

底を支え高揚させた。(6月2日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第448回定期演奏会(2017.7.22)

「メキシコシティ・マイ・メキシカン・ソウル」をテーマとし、メキシコから国際的に活躍するアロンドラ・デ・ラ・パーラを迎え、モーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』序曲から軽やかに始めた。次のモーツァルト『クラリネット協奏曲』は、アレッサンドロ・カルボナーレのソロにより、繊細な音色を駆使し歌い込む。アンコールでは、『クラリネットロジア』（チャーリー・パーカーによる）で即興的にコミカルに音楽を表現し観客を魅了した。後半は、アロンドラ・デ・ラ・パーラの得意とする情熱的なダンスのリズムを特徴とするラテン・アメリカの作曲家の作品に焦点をあてる。ラテン系の多種多様な打楽器を使用したメキシコからモンカーヨ『ウアパンゴ』、マルケスの『ダンソン第2番』。最後のエネルギーギッシュなヒナステラの『エスタンシア』組曲で更に盛り上げ、アンコールで再度、第4番の『マランボ』を熱演し、

観客総立ちで幕を閉じた。(7月22日、愛知県芸術劇場コンサートホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第450回定期演奏会(2017.10.6)

本公演は、「名古屋・名古屋の歌声とともに・宗教改革500年」をテーマに、2大作品に焦点をあてる。前半は、メンデルスゾーンの『交

響曲第5番ニ長調・宗教改革』。後半は、今回のメインとなるオーケ

ストラ、合唱団、ソリストを含めて総勢300人を超え視覚的にもインパクトがある壮大な大曲であるオルフの世俗カンタータ『カルミナ・

ブラーナ』。出だし、男声合唱が少々不安定で、合唱団のバランスにはらつきがあったものの、曲が進むにつれてオーケストラとの調和もとれ作品をまとめあげた。出番はそれほどないものの名古屋少年少女合唱団の歌声は、美しかった。3名のソリストでは、出番の多いバリトンのトーマス・パウアーの

特筆すべきは、プログラムの解説のみならず、全25曲の合唱作品の水野みか子史による日本語訳が別紙として挟まれていたことである。

(10月6日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

セントラル愛知交響楽団 第158回定期演奏会 (2017.11.24)

音楽監督であるレオシュ・スワロフスキー指揮によるロシアの作曲家によるプログラム。決然とトゥツティで始まり、軽快で切れ味のいい弦楽器のパッセージ、美しい第2主題、グリムカによる歌劇『ルスランとリュドミラ』序曲で、爽快な気分により1曲目を引き締める。次のプロコフィエフ『ヴァイオリン協奏曲2番』は、アンドレイ・バラノフによる圧倒的な集中力と歌い込まれた表現力の高さにより、冒頭のソロから一気に観客を魅了した。2楽章の優美で透明感のある音色は、更に音響を聴き込んで演奏された。アンコールは、バッハのサラバンド・ニ短調。ホールの音響の素晴らしさが引き立つ曲を選んだと述べたように、しっとりとした深みのある演奏であった。後半は、チャイコフスキー『交響曲第5番』。「運命の動機」が全楽章を通じて、色彩豊かに展開され全体を統一し、終楽章では、壮大な響きに昇華され、時間を感じさせない惹かれる演奏であった。(11月24日、しらかわホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第456回定期演奏会(2018.4.21)

文豪にちなんだ作品をとりあげる新シリーズ、〈文豪クラシック〉の一回目は、ドフトエフスキーの監獄での体験談を元にした『死の家の記憶』に基づいたヤナーチェクの歌劇『死者の家から』組曲から。悲痛な叫びを表現した重々しい音響、金管楽器の独特の煌めきをうまく表現。2

曲目は、マリンバの大茂絵里子を迎え、伊福部昭の『ラウダ・コンチエルトータ』。祈るような旋律、野性的な音色、土俗的なリズム感を含む単一楽章作品を、緊張感のある演奏で弾ききった。大茂は、愛知県立芸術大学卒業で、地元のアンの為か、アンコールは『故郷』。後半は、ブルガリア生まれの指揮者、ロッセン・ゲルゴフによる選曲で、同国のマリン・ゴレミノフの『弦楽のための5つのスケッチ』。親しみ易い

旋律を美しく奏でた。最後は、25名の金管楽器による華やかなファンファーレから始まるヤナーチェクの『シンフォニエッタ』をドラマチ

ックにまとめた。(4月21日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第457回定期演奏会(2018.5.19)

文豪クラシックシリーズの第2弾は、バイロンの『マンフレッド』。前半はモーツァルト作品。アレッシオ・アレグリーニを迎えて、一般にも馴染みのある明朗な旋律の『ホルン協奏曲第1番』を軽快にまとめた。

次の歌劇『皇帝ティートの慈悲』序曲は、オペラハウスでも国際的に活躍する指揮者ユベール・スダーンにより、ダイナミックな低音弦ではじめ、音色を丁寧に扱った管楽器の二重奏を上品に挟んだ。『ホルン協奏曲第4番』では、ホルンの男性的な音色、ロマン的で甘い響き、軽快さなどの繊細な魅力を引出した。アンコールは、ロッシーニの『狩のランデヴー』で聴衆を沸かせた。後半は、1時間弱もあり、打楽器5名、ハープ2台の大編成のチャイコフスキー『マンフレッド交響曲』。強弱記号 **fff** までの迫力で、マンフレッドの執拗な苦悩、嘆きを飽きさせずに音で表現した。終楽章にパイプオルガンを含む改訂版でも是非聴いてみたい。

てみたい。(5月19日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第459回定期演奏会(2018.7.14)

文豪クラシックシリーズの第4弾。デュティユーの《遙かなる遠い

国へ》。ボードレールの『悪の華』をもとに彼の象徴的、神秘的で夢の

ような世界観をニコラ・アルトシユテットのチェロの繊細で研ぎすま

された緊張感でみごとに表現した。打楽器とチェロの交錯した音響の美

しさに心を奪われた。アンコールでは、周知の名曲ではなく、あえて、

デュティユーの難曲《ザッハーの名による3つのストロフ》を選び、

色彩豊かなチェロの響きで聴衆を魅了した。アンコールのせいか、聴衆

の集中度が高かった。後半はメンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》か

ら台詞の含むメロドラマの部分を省いた8曲。名誉客演指揮者ティエリ

ー・フィッシャーにより軽快で哀愁漂う旋律による序曲に始まり、第3

曲で盛田麻央、富岡明子による重唱、愛知県立芸術大学女声合唱団を含

み優雅で爽やかに歌い上げた。第7曲の聴き所であるホルンのミスが気

になった。(7月14日、日本特殊陶業市民会館フォレストホール)(伊藤美由紀)